

ほ ど 教育センター通信

火床の火の心を紡ぐ

第8号（通算 102号）
令和4年 12月 22日
三条市教育委員会
教育センター 発行



不登校の現状と対応について

学校教育課 指導主事 大野 郁子

文部科学省が10月に発表した令和3年度全国の不登校児童生徒の数は、過去最高の244,940人でした。前年度から2割以上増加し、過去最高の数となりました。小学生では1.3%、中学生では5.0%という割合です。三条市でも、全国と同様の傾向で、小学校で1.23%、中学生で4.32%と、特に令和元年度以降、急増しています。

「学校に行きたくない」というのは、児童生徒のSOSです。しかし、その原因は一人一人異なっています。友達関係、学習障害、生活リズムの乱れ、家庭の人間関係、ゲーム依存等様々です。複合的な場合もあります。

先生たちをお願いしたいことの一つ目は、未然防止です。学級、学校にその子の居場所はあるでしょうか。温かい関係や絆づくり、分かりやすい授業づくりをお願いします。二つ目は初期対応です。いつもと違うサインをキャッチしたら、まず、児童生徒の話をよく聞いてください。三つ目は、一人で抱え込まないことです。学年主任や学年部主任、管理職に話し、対策会議を開いてください。市内のある学校の校長先生が『子どもと共に1・2・3・4・5・6運動』を大切にしています。」とおっしゃっていました。

「1・2・3」はみなさんご存じの休み始めの対応です。「4・5・6」は、その校長先生オリジナルです。4は校内対策委員会、5は保護者や本人を含めた会議、6は生徒支援・保護者支援について生徒指導主事、管理職も含めての会議とのことでした。学校規模によって、4・5・6は変わると思いますが、児童生徒を支える大人たちが、情報を持ち寄り、分析し、同じ方向を見て力を合わせることで、SOSの解決のために必要です。

学校だけで解決が難しい時には、ぜひ教育委員会に相談してください。不登校関係は私が担当です。専門職や関係機関と連携して解決していけるように、一緒に考えます。学級に戻ることにこだわることではなく、社会で生きていく力を付けられることを大切に、児童生徒の未来のために力を合わせていきましょう。

学 園 紹 介

一ノ木戸ポプラ学園

◇第2回学園運営協議会

第2回学園運営協議会で、一ノ木戸小学校・第二中学校の授業参観を行った後、学園運営協議会委員と教職員、小学校総務委員会児童、中学校生徒会役員生徒で「子どもと共に語る会」を行いました。「あいさつがあふれる地域にするために」というテーマで、大人と子どもとがそれぞれの立場からの考えを発表し、交流しました。

一ノ木戸ポプラ学園では、毎月15日に「さわやかあいさつ運動」を行うこととし、校地内だけでなく、自宅前や交差点等であいさつ運動を行っています。活動を続けていくことで、さわやかなあいさつであふれる地域を目指しています！

アイスブレイキングで、より話しやすい雰囲気になりました



出された意見を模造紙に整理し、全体で共有しました

瑞穂学園

◇防災教育研修会



今年度、三条市の防災教育重点実施学園として、瑞穂学園では2回の防災教育授業研修会を実施しました。

1回目は10月19日(水)の学園職員向けの研修会です。月岡小と西鱈田小の6年生が本成寺中を訪れ、中学3年生から防災教育で学んだことの発表を聞いたり、新聞紙を使ったスリッパ作りなどをグループごとに体験したりしました。中学生が発表する姿からは、学んだことを伝えようとする意欲が感じられました。また、6年生は

中学生の発表に耳を傾け、これからの中学校での学びをイメージしているようでした。

授業後には、学園教職員を対象に、安全管理の研修を行いました。群馬大学大学院の金井昌信教授を講師として、避難所運営をテーマに、刻々と状況が変化の中で素早い判断をすることの難しさや、日頃からの地域のつながりの重要性を学ぶことができました。

参加者からは「マニュアルの見直しをしなければならないと思った。」「災害対応でこれまで考えたことが無いようなことばかりだった。考えたことがあるとないとは、初動の速さが全く異なると感じた。」等の感想があり、情報を基に想像力を働かせることの重要性を学ぶ機会となりました。

2回目は11月25日(金)の市内教職員向けのオンライン研修会です。

この研修会は、県中学校教育研究会の「総合的な学習の時間(防災教育)」の研究発表会を兼ねて実施しました。

「学習問題を自分事としてとらえることのできる防災教育～自己の生き方に生かすための学習課程の工夫～」を研究主題として、これまでの取組をまとめた動画を視聴しました。その後、グループ協議を行い、「子どもたちに、いかに自分事としてとらえられるように授業を仕組んでいくか」について熱心な議論が交わされました。

今後、今年度の実践を基に、防災教育カリキュラムが自学園化され、小中学校の連続した学びの礎となっていくことが期待されます。



しただの郷学園

◇深めよう絆スクール集会

しただの郷学園は、11月1日（火）に下田中学校体育館で「深めよう絆スクール集会」を開催し、小学6年生と中学1年生が意見交流をしました。前半は、新潟大学附属長岡小学校 岡田 順子 様 から御講演をいただき、「嫌なことを全て無くせば、安心できる学校になるのか」という問いについて、児童生徒は真剣に考え、相手を思いやり、理解する大切さに気付くことができました。後半のグループワークでは、各学校で事前に検討した「いじめを見逃さない取組」を発表し合いました。小学生の発表を聞き、中学生は「実現するにはどうすればいいか」と質問して補足したり、「どのような行動をとればいいかだけでなく、どんな時にいじめが起きるのかを考えておくことが大切である」とまとめたりするなど、話し合いを通して、考えを深める様子が見られました。



大崎学園

◇双華会役員選挙、大崎学園絆づくり集会

来年度の大崎学園のリーダーを選ぶ、双華会役員選挙が行われました。立候補者は朝の挨拶をしたり、給食時には選挙演説ビデオを流したり、と今後の大崎学園の事を考え、元気にアピールする姿が見られました。また、選挙管理委員会は、前期課程の5・6年生に、選挙の進め方などの説明活動を行いました。

選挙当日は、5・6年生も立会演説会に参加し、来年度は後期課程に進級する6年生も投票に参加しました。

8年生にとっては、9年生の思いを引継ぎ、学園のリーダーとして自覚を高める機会となりました。また、6年生や7年生にとっては、双華会の中心となって活動していく意識を醸成する大切な機会となりました。

11月30日（水）に「大崎学園絆づくり集会」を行いました。この日を迎えるまでに、絆ダンス練習、メッセージカード作り等の準備を後期課程のリーダーたちが中心になって進めてきました。

当日は1～9年生全員で絆ダンスを行い、54班に分かれて話し合いをしたり、折り紙でハートを作ったりしました。優しく丁寧に教えてくれるお兄さんやお姉さんと仲良くなることができ、前期の子どもたちの満足そうな笑顔が見られました。

また、今年度は、子どもたちが所属感をより感じられるように、全校一斉に「絆づくり学活」の時間を事前に設け、班の顔合わせや自己紹介カードの交換などを行いました。この時、下級生が話しやすいように、上級生が目線を下げて耳を傾ける姿が見られました。さりげない行為ですが、下級生は自分の話を聴いてくれると感じ、「認められた」と実感できます。1～9年生が一緒になって、相手の話を聴き合う雰囲気が生み出せるのは大崎学園のよさであることを改めて実感しました。

「存在を認められた」と感じる経験を積み重ね、学園生の所属感や安心感がより高まってほしいと思います。



重点教科研修（外国語・英語）を実施しました

外国語・英語の授業力を磨くことを通して、児童・生徒の外国語・英語の関心や意欲、学力の向上を図るために、重点教科研修（外国語・英語）を今年度開始しました。

今年度は、三条学園、四つ葉学園、さかえ学園、ただの郷学園の4学園が授業実践に取り組みました。各学園の実践の概要を、実施日順に紹介します（①学年・単元、②授業の内容）。

1 ただの郷学園・森町小学校（五十嵐靖子教諭）10月12日（水）実施



① 6年 Unit 5 What did you do last weekend?

②先週末にしたことについて、相手に尋ねたり、相手の質問に答えたりしました。授業者は活動量を確保するとともに、やり取りのポイントを掲示して児童への意識付けを図りました。

2 さかえ学園・栄中央小学校（名古屋康秀教諭）10月27日（木）実施



① 3年 Let's Try1 Unit 5 What do you like?

②What ~ do you like? が、相手の好み分からない時に便利な表現であることに気付かせた後、インプットの質や量を意識した練習を行い、インタビュー活動を行いました。

3 三条学園・裏館小学校（松崎信岐教諭）11月7日（月）実施 ※市教研（外国語・英語）の発表を兼ねた。



① 3年 Let's Try1 Unit 5 What do you like?

②多数の教職員が参観することから、児童は「◎初めての人とやり取りするとき、何に気を付けたらよいのだろう」を共有し、参観者へのインタビューに意欲的に取り組みました。

4 四つ葉学園・第四中学校（田中あや教諭）11月28日（月）実施



① 2年 Lesson 5 Things to Do in Japan(USE Write)

②「先生方に合う三条周辺のおでかけスポットを考えよう」という課題に対して、誰に、どこをお勧めするか、ペアごとに英語で互いに提案し、その内容を基に紹介文を作成しました。

各校の実践で、子どもたちが「相手意識をもったやり取り」を行えるように授業を展開していることが印象に残りました。また、栄中央小学校では総合的な学習（国際理解教育）と関連付け、学習した表現が外国の子どもたちとの交流に役立つと実感させようとしていました。第四中学校では授業者や生徒の英語使用量の多さや、帯活動（English Talk;ペアで即興の会話をする活動）の実践など、小・中の学びのつながりの重要性を感じる取組があり、各校の工夫を学ぶことができました。